

新約聖書「コリントの信徒への手紙 二」

井田 泉（日本聖公会奈良基督教会）

1. はじめに

コリントは、パウロの手紙が書かれた当時、ギリシアの大都会でした。自由人と奴隷合わせて70～80万人の人口があったとも言われます。交通の要衝であり、また交易と通商によって栄えていました。豊饒の女神アフロディテ、太陽神アポロなどを崇拝する宗教が盛んでした。同時に、ユダヤ人も多数住んでいて、土曜日にはユダヤ教の会堂礼拝が行われていました。

パウロは第2回の宣教旅行のときにコリント教会の基礎を築きました（使徒言行録18:1-18）。彼が離れた後、コリント教会は大きく発展しましたが、しかし放置できない問題が多数生じていることがパウロに伝わってきました。富める者、力ある者たちの横暴と貧しい人たちの疎外、教会内の不和と分裂、生活の墮落、礼拝の混乱、福音の歪曲といった問題がはなはだしくなっているというのです。パウロはこれを心配し、あるべき信仰と生活を回復させるために、情熱をこめて数度にわたって手紙を書きました。「ローマの信徒への手紙」などとは異なり、コリントの教会に書き送った二つの書簡にはパウロの感情が繰り返し前面に出てきます。言い換えれば、パウロはやむにやまれぬ思いで、気持ちを何度も高ぶらせながら、しかし祈りつつこれらの手紙を書いたのです。



パウロはこれを心配し、あるべき信仰と生活を回復させるために、情熱をこめて数度にわたって手紙を書きました。「ローマの信徒への手紙」などとは異なり、コリントの教会に書き送った二つの書簡にはパウロの感情が繰り返し前面に出てきます。言い換えれば、パウロはやむにやまれぬ思いで、気持ちを何度も高ぶらせながら、しかし祈りつつこれらの手紙を書いたのです。

パウロのコリント滞在は紀元50年頃で期間は約1年半。第一の手紙は54年頃、第二の手紙は56年頃書かれただろうと言われています。

第一の手紙による衝撃は大きく、パウロとコリントの信徒との関係は一部には改善（「悔い改め」二7:9）が見られた反面、逆に他方ではさらに不信や対立を招く結果となったようです。そこでパウロはもう一度手紙を書くことになりました。もっともこの第二の手紙の構成は複雑で、複数の手紙が組み合わされている、という説も有力です。今回はこの手紙の構成や流れにはとらわれず、わたしにとって印象的と感じられたところを自由に取り上げてお話しします。

2. パウロの回心と記念の祈り

ところで偶然ですが、本日1月25日は日本聖公会では「使徒聖パウロ回心日」です。そこで

「使徒言行録」からパウロの回心の箇所をいくつか読んでおきましょう。

「9:1 さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、2 ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。3 ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。4 サウロは地に倒れ、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』と呼びかける声を聞いた。5 「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。6 起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。』7 ……8 サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。9 サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。10 ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、『アナニア』と呼びかけると、アナニアは、『主よ、ここにおります』と言った。」

アナニアは主が命じられた言葉に従って出かけ、パウロを尋ねて手を置いて彼のために祈りました。

「9:18 すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、19 食事をして元気を取り戻した。」

ここから彼の新しい生涯が始まります。わたしはパウロの回心は、十字架と復活のイエスとの決定的な出会いの出来事であり、またそれは彼がかつてステファノの殺害に荷担したことによる良心の痛みと深く関係していると考えています。パウロの信仰と活動、また彼の手紙の背景には彼のこの回心体験があると思うのです。

使徒聖パウロ回心日の祈りをアメリカ聖公会の祈祷書から訳してみますと、次のようです。

「神よ、あなたはあなたの使徒パウロの宣教によって世界中に福音の光を照らされました。どうかわたしたちが彼の驚くべき回心を記憶し、彼の聖なる教えに従うことによって、わたしたち自身の感謝をあなたにあらわすことができますように。……わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン」

3. 「使徒言行録」に記されたパウロのコリント宣教

使徒言行録（18:1-18）に記されているパウロのコリントでの活動を、前回の繰り返しになりますが少し見しておきましょう。パウロはアテネを去って西のコリントに行きました。ここで彼は、ローマを退去させられてコリントにやってきたアキラとプリスキラ（プリスカ）というクリスチャン夫妻と出会いました。パウロはテント造りを仕事としており、この夫妻も同じ仕事であったこともあって、パウロは二人の家に住み込んで一緒に仕事をすることになりました。この夫妻のことは第一の手紙の終わりのほうに出て来ます（16:19）。

パウロは土曜日の安息日ごとに、ユダヤ教の会堂でイエスが救い主（キリスト）であることを熱心に論じました。しかしこの書簡によれば、彼はコリントでの活動を始めたとき、元気に溢れていたわけではありません。まったく正反対であったというのです。

「2:3 そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした。4 わたしの言葉もわたしの宣教も、知恵にあふれた言葉によらず、“霊”と力の証明によるものでした。」(コリント一)

パウロはコリントで激しい抵抗に遭いましたが、やがて会堂長クリスポとその家族が、一家をあげて主イエスを信じるようになりました。ほかにも多くの人々がパウロの言葉を聞いて洗礼を受けました。しかし迫害の激しさや多くの困難に直面して、パウロは意気消沈することがありました。彼はイエスの名を呼び、切に助けを求めたに違いありません。使徒言行録にはこう書かれています。

「18:9 ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。『恐れるな。語り続けよ。黙っているな。10 わたしがあなたと共にいる。』」

あるときユダヤ人たちの集団がパウロを襲い、捕らえてコリントの法廷に引き立てて行き、パウロの罪を訴えました。しかしアカイア州の総督ガリオンはこれを取り上げようとしませんでした。怒った群衆は、ソステネという会堂長を捕まえて殴りつけました。第一の手紙の差し出し人にはソステネの名前が挙げられています。この会堂長ソステネが、パウロの同労者になったのかもしれない。

4. 第二の手紙の始まりと「慰め」

「1:1 神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会と、アカイア州の全地方に住むすべての聖なる者たちへ。2 わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」

第二の手紙はテモテとの連名になっています。あらゆる彼の手紙がそうであるように、この手紙もまた、祈りで始まり祈りで閉じられます。

この手紙を読み始めてまず気づくのは、「慰め」という言葉が繰り返されていることです。これは、コリントの教会の人々とパウロの間に起こった激しい葛藤のゆえではないでしょうか。

「1:3 わたしたちの主イエス・キリストの父である神、慈愛に満ちた父、慰めを豊かにくださる神がほめたたえられますように。4 神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。5 キリストの苦しみ⁵が満ちあふれてわたしたちにも及んでいるのと同じように、わたしたちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれているからです。」

「キリストの苦しみ⁵が満ちあふれてわたしたちにも及んでいる。」それと同じように、「わたしたちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれている。」

このような表現は尋常ではありません。文学的技巧を凝らしてパウロがこう書いたとは思えません。コリントの人々との葛藤、伝わらない愛の情熱——そういう中でパウロは苦しんでいます。第2章で彼はこう言っています。

「2:4 わたしは、悩みと愁いに満ちた心で、涙ながらに手紙を書きました。あなたがたを悲しませるためではなく、わたしがあなたがたに対してあふれるほど抱いている愛を知ってもら

ためでした。」

彼の苦しみの中に、キリストの生涯と十字架の苦しみが満ち溢れてくるのです。けれどもそのキリストの苦しみはわたしたちを愛してやまないゆえの苦しみなので、その苦しみからキリストの慰めが満ち溢れてくる。コリントの人々とパウロはキリストの苦難を共有しているがゆえに、現実には対立や不信、葛藤があったとしても、慰めをもまた共有している。

「1:6 わたしたちが悩み苦しむとき、それはあなたがたの慰めと救いになります。また、わたしたちが慰められるとき、それはあなたがたの慰めになり、あなたがたがわたしたちの苦しみと同じ苦しみに耐えることができるのです。7 あなたがたについてわたしたちが抱いている希望は揺るぎません。なぜなら、あなたがたが苦しみを共にしてくれているように、慰めをも共にしていると、わたしたちは知っているからです。」

個人的なことを申し上げますが、わたしは神学校を卒業してまもなく43年。まもなく定年退職を迎えます。その間に、教会、教派（教団）の中でたくさんの葛藤、不信、対立も経験してきました。それでもこのような満ち溢れるキリストの苦難と、キリストからの慰めを経験してきただろうか、と自分に問うてみます。そう思いつつも、ここをあらためて読むと、欠けの多い自分にもキリストの苦難とキリストの慰めが溢れてくるように感じます。

プロテスタント教会初期の重要な著作「ハイデルベルク信仰問答」（1563）は次のように始まっています。

〈問〉生きるにも死ぬにもあなたのただ一つの慰めは何ですか。

〈答〉体と魂を持つわたしが、生きるにも死ぬにもともにわたしのものではなく、わたしが信頼する救い主イエス・キリストのものである、ということです。

このようなパウロの語ったキリストのゆえの慰めの言葉なしに、「ハイデルベルク信仰問答」の第一がまとめられたとは思えないのです。

5. キリストの香り

「慰め」という言葉の次にわたしにとって印象的なのは、「香り」という言葉です。

「2:14 神に感謝します。神は、わたしたちをいつもキリストの勝利の行進に連ならせ、わたしたちを通じて至るところに、キリストを知るという知識の香りを漂わせてくださいます。15 救いの道をたどる者にとっても、滅びの道をたどる者にとっても、わたしたちはキリストによって神に献げられる良い香りです。16 滅びる者には死から死に至らせる香りであり、救われる者には命から命に至らせる香りです。」

「香り」という言葉がこんなところに出て来ました。1ヵ月前、わたしたちはクリスマスを祝いました。そのクリスマス物語の中に、いわゆる東の国の博士の話があります。はるばる彼らが携えて来たのは、黄金、乳香、没薬でした。乳香は良い香りのするもの。火を付けて立ち昇る香りと煙は、祈りをあらわすものです。また旧約聖書・詩編の中にはこのような言葉があります。

「わたしの祈りを御前に立ち昇る香りとし

高く上げた手を、夕べの供え物としてお受けください。」141:2

神に向かって立ち昇る祈りの香りですが、それは同時に、周囲にも香りを放つ。コリント第二の15節は、つづめて言えば「わたしたちは良い香りだ」というのです。わたしたちがイエス・キリストと深くつながって生きて歩むとき、わたしたちはキリストの香りを放つ。そのような者として成長したいと願います。

ところでわたしは、1985年から2000年までの15年間、聖公会の神学校の専任の教師をしていました。毎週1回、神学校の中心の聖餐式があります。神学生が10名程度、教師が5名程度でしょうか。聖公会は儀式的、典礼的な聖餐式を行います。宗教改革から出発した教会ではありますが、この点がプロテスタント諸教会と違うところです。その神学校の聖餐式を司式していて、パンとぶどう酒を聖別して皆にひとりひとり配るのですが、何の拍子か、ぶどう酒の飛沫が式服の白いサープリスに付いた。聖別した杯からのものですから、普通はそういうことはあり得ない、あってはならないことです。驚いたのですが、不思議なことにそのとき、そのわたしが着用しているサープリスから、何ともかぐわしい香りがするのです。「キリストの香り」を実際にかいだ、感じた、初めての経験でした（これは厳格な立場からすれば危険な話です）。

ルターはキリストの愛をしばしば「甘い」と表現しますが、「かぐわしい香り」という仕方で具体的、感覚的にこれを経験することも、大切なことではないかと思えます。

6. 主の霊のもたらす自由

この手紙の中でパウロは詳しく展開している訳ではないのですが、大切に聞いておきたい言葉が第3章にあります。それは「自由」という言葉です。

「3:16 しかし、主の方に向き直れば、覆いは取り去られます。17 ここでいう主とは、「霊」のことですが、主の霊のおられるところに自由があります。18 わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。」

なぜここでパウロがこのことを言わなければならなかったかは、今後のわたし自身の課題としておきたいと思うのですが、「主の霊のおられるところに自由がある」「主の霊の働きによって主と同じ姿に造りかえられていく」という言葉に出会って、思い出すことがあります。それは、わたし自身がいかに不自由であったか、ということです。とりわけ学生時代です。

わたしは幼児洗礼を受けて、子どものときから素朴な信仰をもって成長しました。ところが学生時代に嵐に見舞われることになりました。当時は学園紛争の時代で、わたしの通っていた大阪外国語大学（当時は大阪市天王寺区上本町8丁目）でもおよそ1年間、授業がありませんでした。わたしは政治的立場としてはそれほどラディカルではなかったので、「闘争」には加わりませんでした。しかしキリスト者として何かしなければならぬ、しかし何もできない、という堂々巡りの中でひどく苦しんでいました。わたしにとってのキリスト教信仰は「キリスト者はかくあらねばならない」ということが非常に強く、しかし現実には何もできないことで無力感に捕らわれ、身動きのできない状態に陥っていました。「ねばならない」に縛られて、どうしようもなくわたしは不自由で出口がありませんでした。そうした時期に復活のイエスさまと出会う、という不思議

な経験をし、それがわたしの回心、またその後のわたしの原点になるのですが、今はこれには触れません。

大学から同志社の大学院に進み、年度末のレポート書くために教義学（組織神学）のむつかしい本を読んでいました（カール・バルト『教義学』の「和解論 I /1」）。1頁読むのに1時間くらいもかかる、わたしにとっては難解な本だったのですが、1週間くらい読んでいるうちに、温かな光が差ししてくるようになってきました。わたしが何かをしなければならないという前に、わたしが何もできないと嘆く以前に、イエス・キリストをとおして神さまからの恵みの事実がある。その恵みの光が差ししてくる。それがわたしを包み、わたしを自由にし、力を与える。これが福音というものだったのか、という驚きと喜びでした。

「主の霊のおられるところに自由があります。」

人間は単純にはいかないもので、その後はまた「牧師はこうあらねばならない」とか、神学校の教師はこうあるべきだとか、幼稚園では園長はこうあるべきだ、……というもろもろの「あるべき」にしばしば縛られるのですが、主の霊、主イエスの霊がわたしを解放して自由にしてください、ということはキリスト教の中心に据えておきたいと思います。牧師が不自由で、どうして自由の福音が伝えられるでしょうか。これが退職前のわたしの反省でもあります。

ある夜、ニコデモという最高法院の議員で有力な教師がイエスを訪ねてきました。ニコデモに対してイエスは、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」（ヨハネ 3:8）と言われました。これは不自由なニコデモを自由にする聖霊の風をイエスが送られたのだと思いますが、それをニコデモは理解できなかった。しかしイエスの十字架での死において、彼は束縛から解放されて、イエスを葬るのです（ヨハネ 19:39）。

7. 土の器に宿るキリストの命

「4:1 こういうわけで、わたしたちは、憐れみを受けた者としてこの務めをゆだねられているのですから、落胆しません。……5 わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています。……6 『闇から光が輝き出よ』と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。7 ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。」

「土の器」とは、まずはパウロ自身のことです。「土」は弱さ、もろさ、はかなさを意味します。ここで思い出すのは、神が最初に人を造られたとき、「土の塵」から造られたことです（創世記 2:7）。しかし神はその人に、ご自身の命の息を吹き込まれました。もう一つ思い出すのは、理不尽な苦難の中に置かれたヨブの姿です。

「2:7 サタンはヨブに手を下し、頭のとっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかからせた。8 ヨブは灰の中に座り、素焼きのかけらで体中をかきむしった。」

この「素焼きのかけら」と訳されたものが陶器、まさに土の器です。自分はこのようなもろく

惨めな土の器に過ぎない。しかしその土の器たる自分の中に、神はすばらしい宝を納めてくださった。その宝とは、「福音」のこと、また「イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光」です。神からの光、また神を知る光が自分の中に宿されている。キリストの命を宿している、と言い換えてもいいかもしれません。

そのような宝を宿していることはすばらしい。しかし一方では非常な苦しみを伴います。

「4:10 わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっています、イエスの命がこの体に現れるために。11 わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。」

パウロはイエスの死を体にまとっているがゆえに、死ぬほどの苦痛を自分も免れることができない。ところでこの「イエスの死」は単なる死（θάνατος タナトス）ではなく、νέκρωσις（ネクローシス）という言葉が使われています。これは「プロセスとしての死」という意味があって、新しい聖書協会共同訳では「死にゆくイエスを」と訳しています。けれどもこの「ネクローシス」には、「死なせること」つまり「殺害 killing」という意味があります。わたしは、あえて「イエスの殺害」（イエスを殺したこと、殺されたイエス）と理解したいのです（We are always carrying about in the body the killing of Jesus. C. K. Barrett）。

パウロは殺されたイエスを自分の体に担い運んで生きている。イエスを憎んだ憎しみ、イエスを迫害した迫害、イエスを殺した殺害、それと同じものがパウロを苦しめ続けているのです。彼自身にもステファノ殺害の負い目がある。しかしそれで終わりではありません。この主と共に苦しむ苦しみをとおしてこそ、イエスの復活の力、限りないキリストの命が彼に注がれ続けている。そのゆえにパウロは読者にこう語ります。

「4:14 主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。」

神は、人間的な誇りや力の争いに陥ったコリントの人々を一度打ち倒されるかもしれません。しかしそれを経てこそ、コリントの人々はイエスの復活の命を経験するでしょう。そうして彼らは、神に愛されている者として、パウロと共に神の前にしっかりと立たせていただくのです。

「4:16 だからわたしたちは落胆しません。」

8. 正気を失うパウロ

パウロはこの手紙の中で何度か気を高ぶらせて、激しい言葉を用いています。中でも顕著なのは次の言葉です。

「5:13 わたしたちが正気でないとするなら、それは神のためであったし、正気であるなら、それはあなたがたのためです。14 なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。わたしたちはこう考えます。すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだことになります。」

もう一箇所。

「11:21 だれかが何かのことであえて誇ろうとするなら、愚か者になったつもりで言いますが、

わたしもあえて誇ろう。22 彼らはヘブライ人なのか。わたしもそうです。イスラエル人なのか。わたしもそうです。……23 キリストに仕える者なのか。気が変になったように言いますが、わたしは彼ら以上にそうなのです。苦勞したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。」

11 章のほうはあえて自分の誇り、自分の労苦を吐き出すように語りますが、それは次の言葉に行き着きます。

「11:29 だれかが弱っているなら、わたしは弱らないでいられるでしょうか。だれかがつまづくなら、わたしが心を燃やさないでいられるでしょうか。」

このあたり、聖書の解釈からはみ出しますが、わたしには連想するものがあります。それは学生時代に読みふけたデンマークの思想家キルケゴールの『死に至る病』の一節です。

「決定的なことはこうである、——神には一切が可能である。……もはや（人間的な意味では）いかなる可能性も存在しないようになったとき、そのとき始めて今いったことが真剣に問題となるのである。……だがそれでは、それこそ全く公式通り『正気を失う』ことになりはしまいか？ しっかり！ 信ずるといのは実に神を獲得するために、正気を失うことにほかならない。」

この言葉は、もう 50 年近くも前にわたしを打ちのめした言葉で、コリント書簡と結びつけるのは乱暴かもしれません。しかし、心が燃えること、霊に動かされること、正気を失うこと——そういうことが失われるなら、わたしたちは福音の中核、キリストの命を見失うことになるのではないか。緻密な聖書の研究の中で、生きた神さまを見失うのではないか、ということ自戒を込めて心にとどめたいと思います。

9. 肉体のとげと弱さをとおして働くキリストの力

「12:7 また、あの啓示された事があまりにもすばらしいからです。それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。8 この使いについて、離れ去らせてくださるよう、わたしは三度主に願いました。9 すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」

パウロは持病を持っていたようです。それは耐えがたい痛み、苦痛を伴うものであり、彼の働きの妨げとなるものでした。しかし主から示された答は、苦痛を取り去ることではなく、「力は弱さの中でこそ十分に発揮される」ということでした。

イエス・キリストを信じてその働きに加えられる者も、ある場合には祈りに対してこのような答を聞かされることがあるでしょう。

コリントの信徒との間に葛藤を抱え、この手紙でもしばしば感情を爆発させるような語り方をしたパウロは、最後は三位一体を示唆するこの祈りをもって全体を締めくくります。

「13:13 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。」